

第36回新潟大腸肛門病研究会

日時 平成7年12月2日(土)
午後3時～5時30分
会場 ホテルイタリア軒

I. 一般演題

1) 終末回腸微小腺腫の4例

吉田 英毅・本間 照
鈴木 裕・中村 厚夫
杉村 一仁・成澤林太郎
朝倉 均 (新潟大学第三内科)

5mm以下の終末回腸微小表面型腺腫を4例経験した。消化管 polyposis はなく家族歴に特記事項はなかった。全例無症状で、3例に他臓器癌、1例に大腸腺腫の同時性ないし異時性の合併を認めた。病変部位はいずれも回盲弁から5cm以内の終末回腸で、長径は全て5mm以下(4×4mm, 5×3.5×1mm, 5×5×1mm, 3.5×3×0.5mm)であった。肉眼形態は表面型(4mmのものはIIc様, 他はIIa+IIc様)で絨毛構造が消失し、実体顕微鏡所見は陥凹部で小円形 pit を、隆起部で管状 pit を呈していた。組織診断は管状腺腫であり、p53染色は全例陰性、Ki67染色では陽性細胞は径5mm以下の大腸腺腫と同様に表層200～250μmに分布していた。

2) 2つのIIc病変を含んだ多発早期大腸癌の1例

神田 達夫・佐藤謙一郎
鹿嶋 雄治・坪野 俊広 (秋田組合総合病院)
吉野 友康 (外科)

同時に4つのsm癌を生じた多発大腸癌の1例を報告する。症例は51歳の男性。家族歴にポリポシス・大腸癌なし。貧血あり、大腸内視鏡検査施行。左側結腸に脈管侵襲を伴うsm癌があり、左半結腸切除術施行。横行結腸に2つの表面型のsm癌(IIa+IIc, 3.5×1.5cm, well. IIc, 1.5×1.0cm well) S状結腸に2つの隆起型のsm癌(Ip, 2.0×2.0cm, well. Ip, 2.2cm×2.2cm, moderately)の計4つの癌腫があった。免疫組織染色ではS状結腸のIp sm癌のひとつのみ癌腫部でp53蛋白の異常蓄積が認められた。他の3病変では陰性であった。このことは、発癌にいたる経路が同一固体、更には同一形態、同一部位であっても多様であることを示唆するものと思われた。

II. 主題「大腸癌肝転移の診断と治療」

1) 当院における大腸癌肝転移の治療成績

和栗 暢生・橋立 英樹
田中 勝・磯田 昌岐
森山 雅人・本山 展隆 (新潟県立中央病院)
植木 淳一 (内科)
高木健太郎 (同 外科)
関 裕史・清野 康夫 (同 放射線科)

当院で5年10ヶ月の観察期間中に大腸癌肝転移と診断され、うち病歴を確認し得た68例(男47例, 女21例, 平均年齢65.6±19.4歳)を対象に種々の検討を行った。

肝切除と背景H因子との検討で、H1では肝切除群で有意に生存率が高く、H2, 3では肝切除の有無で生存率に有意差はなかった。間歇的動注療法の有効性は各H群で明らかとならなかった。4例の長期無再発生存例は全例肝切除、動注併用例であった。うち3例はH1単発例であったが、1例はH2であり、積極的治療の可能性が示唆された。また無再発生存期間の検討から異時性肝転移の約75%は原発巣切除後1年以内に確認されており、1年以内の厳重観察が最重要と考えられた。

2) 大腸癌肝転移における反復肝動注療法

畑 耕治郎・坪井 康紀 (新潟市民病院)
五十嵐健太郎・月岡 恵 (消化器科)
何 汝朝・市井吉三郎
山本 陸生・斉藤 英樹 (同 外科)

大腸癌肝転移におけるリザーバーを用いた反復肝動注療法を行い、成績と予後について検討した。肝転移巣に対する直接効果は奏効率34.5%で、50%生存期間は504日であった。肝占拠率をA30%以下、B30～60%、C60%以上と規定すると、1年生存率A81.1%、B60.4%、C16.7%、2年生存率A60.7%、B13.4%、C0%、3年生存率A34.1%、B、C0%であった。多変量解析で検討すると、この肝占拠率が予後に最も寄与する因子であった。治療期間中の肝外病変の出現は44.9%に認められた。本療法は外来での長期継続が可能であるが、動注トラブルが発生すると在宅(通院治療)率を有意に低下させた。